



幻燈会

しあわせなくらし方って？

—今、なぜコーポラティブ住宅なのか—

9月28日。小雨まじりの昼下がり。幻燈会はPeanuts

(スヌーピーやウッドストックが出てくる絵本)の映像から始まった。スライドとは言わず幻燈と言うところに、ことさら興味をそそられる。



Sketch

「しあわせって裸足で芝生の上を歩くこと」「しあわせって、お日様があって、空気があって、緑があって、水があって、土があって、野鳥もやってきて、微生物も…」「しあわせってまわりのお友達に恵まれること」スヌーピーはのんびり自分の小屋の上に寝そべりながらそう言う。

コーポラティブ住宅とは

最近ではテレビなどでも取り上げられているが、実際はどういうものなのか？コーポラティブ住宅とは、住み手が力を合わせてつくった住まいである。発祥の地はイギリスで、約200年の歴史をもっている。日本国内でコーポラティブ住宅が出てきたのは1974年。前年のオイルショックで社会的・経済的潮流が変わり、ゆったりリズムで事を運んでみようというのが住宅づくりにも広がり、市民と専門家の対話の設計が始まった。

コーポラティブ住宅の事業方式としては2タイプある。

①土地ありき型：公的デベロッパーが土地を用意し、設計者が先に基本をつくり、居住者を公募する。それから間取りを決め、庭などもみんなの意見を取り入れながらつくっていく。つくる過程は半分参加。

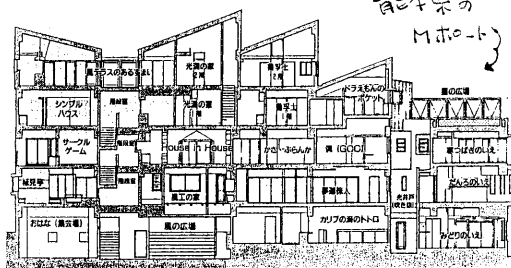
②住み手ありき型：住み手が先に集まって、いろいろくらしの夢を描きながら、土地探しから始める。すべての過程が住み手中心。住み手主導型。

今日までに全国で約7000戸の成果をあげている。そのうちの95%が①の土地ありき型で、残り5%が②の住み手ありき型である。よりコーポラティブ住宅らしいのは後者の住み手ありき型だという。

〈もやう〉という集住体

代表的なものには、熊本県の「Mポート」、大阪府の「都住創」、京都府の「ニューコート」などがある。どれも住み手ありき型だ。住みたいと思う人たちが集まり、いろいろな場所へ出向き住宅・土地ウォッチングをしたり、学習会・交流会などをする。おのずと人間関係もその間に育まれる。建物を建てる段階で建築組合をつくり、みんなが意見を出し合い、話し合い、設計していく。M

ポートでは、空間の分け合い(床を一段上げることにより、階下の家庭にロフトを作るスペースを分けてあげる)なども行われたりする。「もやう」という気持ちはこうした設計の段階で形になる。そして住む段階になると、できあがった集会所で和太鼓のコンサートやクリスマスパーティー、正月には餅つきなど、さまざまなイベントが行われる。ベランダは隣家との区切りがないため、さ



んまを焼いていると、そのいい匂いに誘われ、ビール片手に自然と人が集ってくる。

また子どもたちは回り廊下として駆け回ることができる。昔の長屋のような、大人も子どももくらしやすく暖かい空間がそこにはある。

トラブルをエネルギーに変える

気になるのはトラブルはないのか？ということ。もちろん上げたらキリがない程のトラブルがあるという。トラブルを起こさないというのが今までのマンション形態である。ここではトラブルが起こったらどちらが〇か×というのではなく、住み合う中で話し合い、相手の心を分かり合うというのが重要になってくる。トラブルをエネルギーにできるような、しなやかな心をお互いに育む。それができるのが本当の生きたコミュニティだと言う。

当日は講師の延藤安弘先生(千葉大学工学部教授)の弁士のような語り口と、素晴らしい幻燈に会場みんなが引き込まれた。今の集合住宅は昔の長屋のような「お裾分け」的な要素が減ってきている。隣は何をする人ぞ…ならまだいいが、些細なトラブルで殺人事件が起こる。そんな人間関係の悪化や環境問題が取りざたされる今だからこそ、自然と共存し、人と人がつながり合い思いやりを持ってもらしていけるコーポラティブ住宅は、新しい住まいの提言であり、理想のくらし方なのかもしれない。

